

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

2 中学生編

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

叶えたい夢

第一中学校 2年 齋藤 夏海

私の祖母は理容師です。33年前から、市内で理容店を営んできました。祖母が人生をともにしてきた散髪用のはさみを、泥の中からやっと見つけたのです。

あの日、「大きな地震があったら、何もかも捨てて学校に逃げよう。」と母と約束していたことが本当に起こるなんて思ってもいませんでした。

すぐに届き始めた新聞で、信じられないような出来事や風景を目の当たりにしました。そこに映る人達のことを思うと、あまりの衝撃に言葉も涙すらも出てきませんでした。

津波は、海の近くにある祖母の店にも押し寄せました。窓は全て割れてなくなり、物置は流されていました。壁には津波の爪痕が、私の身長よりも上に刻まれています。店も、街も、周囲は真っ黒な泥。あまりにひどい状況に、ただ呆然と立ちつくすだけでした。いつも明るい祖母も、すっかり落ち込み、ふさぎ込んでしまいました。

それからは、店の泥かきの毎日でした。ずっしりと重い泥を運び出す作業を繰り返しているうちに、「こんな状況で、店はもうできないだろうな…。」そう思っていました。

一カ月が過ぎたある日の夕方、「お店を再開するから、来てくださいね。」と常連さんに連絡する祖母の声が聞こえてきました。「命があるだけでも…」と泣き笑いしながら再開を誓う祖母の姿を見て、はっとしました。困難な状況を受け入れ、それでも前を向こうとしている祖母。今まで知らなかった優しい祖母の強さを見ました。

「あの状況で店の再開などできるはずがない。苦勞してまでやる必要はない。」と、すっかり諦めていたことに、申し訳ない気持ちになりました。

祖母にとって仕事は、かけがえのないものだったのです。その思いの強さに触れ、仕事とは、人が生きる上で、こんなにも大きな支えになるということを知りました。わたしは、こんなに強い気持ちで何かに向き合ったことはありませんでした。

祖母の姿に励まされて、震災以降、ずっと私の心にあった「この地震をデータや研究で予測できなかったのか。」という疑問の答えを見つけるために調べ始めました。すると、数日前

から、地震の回数が異常に増していたこと、緊急地震速報も、直前にしか出せない現状にあることなど、多くのことを知りました。

私は将来地震にかかわる研究をする仕事につきたいと強く思うようになりました。地震をもっと的確に予測し、早く知らせる速報のシステムの開発に携わりたいのです。もう二度と多くの命が失われることがないように。

そのためには、今までのように弱い私ではいけないと思うのです。今の私にできることは、何事も諦めないで最後までやり通すことと考えています。小さな実践ですが、私にとっては夢への第一歩です。人の命を守りたい…この思いをずっと持ち続けることが重要で、強い意志が必要なのだと思います。祖母の仕事への強い思いを見習っていきます。

祖母の店は元の場所で再開しました。今日も、油をさし磨かれたはさみで、お客さんの髪を切っています。楽しい話し声と笑顔とともに…。ぴかぴかのはさみを見る度に、私も強い心で夢をかなえたい…そう思っています。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

今、私にできること

第一中学校 2年 小林 南海

「只今の地震により津波が来ます一。」私は、耳を疑いました。「津波なんてくるわけない。」と、思っていたのです。しかし、避難の途中家の方を振り返った私は、呆然とし言葉を失いました。家の一階部分が水につかっているのを目にしたからです。私の努力、鍛錬の汗がしみ込んだ剣道の防具、教科書、家族との思い出が流されていく。いつも通っていた洋菓子店、友達と勉強やおしゃべりをした図書館、壊れていく様子を想像し、涙がとめどなく溢れ出てきました。くるわけがないと思っていた津波は、一瞬にして私の大切なものをすべて奪っていったのです。

私が避難したとき、一中にはすでに避難してきた方々が300人以上いました。さっきまで友達と勉強したり、語り合ったり、笑ったりしていた教室が、みるみるうちに人であふれかえっていたのです。そこには、地震発生前までの明るい雰囲気、私達の教室という面影は一切ありませんでした。この時から、私達家族の避難所生活が始まりました。

避難所での一日は、寒くて目を覚まします。午前中は朝食，掃除，バケツリレー。午後は，昼食，そしてまたバケツリレー，夕食，就寝…。毎日届けられる新聞に写っているのは，津波が来た瞬間の写真，津波が来た後の原形をなくした町の写真…。あまりにも悲惨な光景でした。「こんな毎日がいつまで続くのだろう。いつまでがまんしなければいけないのだろう。」私は，切ない気持ちでいっぱいになりました。

そんなある日，バケツリレーを終えて教室に戻ると，祖母が私にこう言ったのです。

「疲れているのに，私の分までご苦労様。またよろしくね。」

私は，ハッとしました。82歳になる私の祖母は，避難所生活が始まってから気持ちがすっかり弱くなり，疲れたと言っては横になることが多くなりました。

私は，祖母がトイレに行くときは必ず付き添うようにし，食べ物の制限のある祖母のために，刺激の少ないパンと交換してあげたりしました。寒くないか，いつも気を遣うようにもしました。ふと気付くと，普段はけんかばかりしていた祖母のそばにいて，優しくしている自分がいました。「私達より大変な方々が何千人，何万人といる。

くよくよしているより，今ここで共に生活している方々の力になろう。」私はこの日から，生活している教室の班長を引き受けることにしたのです。

それから私は，夕食の配膳をするとき，明るく前向きにするよう努力しました。いやいややっていたバケツリレーにも積極的に参加し，トイレ掃除も楽しく行うようになりました。だんだん教室にいる方々も明るさを取り戻し，元気になっていくように感じました。そして，私自身，自分勝手な私から，人のことを考えられるように変わったのではないかと思います。

大好きな塩竈は，元の生活に戻りつつあります。私も多くの方々に支えられて，大好きな剣道ができるようになり，ようやく元の生活に戻れたような気がします。そして何より，人に優しくすることは，こんなにも温かく，素晴らしいことなのだ気付きました。

私は，この震災で得た強さ，優しさ，辛抱強さを未だ震災の爪痕の残る被災地の方々に分けてあげられたらと思います。それが今，私にできる精一杯のありがたうなのです。



□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

立志発表会「メッセージ」

第二中学校 第2学年一同

「ポプラの木にはポプラの葉 何千何万芽を吹いて 緑の小さな手を広げ…」 この歌いだしから始まる「名づけられた葉」を歌って、今まで立志を迎えてきました。

今年の震災を受け、「命の大切さ」や「家族のぬくもり」を知りました。そして、震災からの復興とともに「新しいことにチャレンジしていこう！」という想いがわいてきました。みんなの想いと私達の決意を分かち合えるような式にしたいと思います。

入学前の私達は、中学校生活への不安や楽しみを抱えながら中学校に入学しました。「今日から中学生だ」という思いで緊張しながら今より少し大きめの制服を着てのぞんだ入学式。先輩方の真剣さや礼儀正しさなどに驚くと同時に、憧れを抱きました。

対面式では、部活動の紹介や生徒会の説明を聞き、二中をより知ることができました。

入学して間もなく、二中三大行事の体育祭が実施されました。チームワークが試される体育祭。クラスや縦割りごとに少ない時間で、一生懸命練習し

ました。クラスや縦割り内でのチームワークがだんだん強まり、当日の応援や種目ではどのクラスも一致団結した姿を見せることができました。色別応援のときの先輩方の姿は今でも忘れられないくらいかっこよく憧れが一層増しました。去年は自分たちのことで精一杯でしたが、今年は先輩方をサポートできるようになっていたと思います。

学校生活に慣れてきた頃、私達は親元を離れて岩手県奥州市に農業体験に行きました。奥州市の方々は、私達を家族のように迎えてくれ、とても親切に様々なことを教えて下さいました。牛の飼育の仕方や小豆の仕分け作業など農業についてはもちろん、自然の豊かさや、奥州市の良さも知ることができました。農業体験に行ったからこそ見ることができたあの夜の星空は、今でも忘れることができないくらい印象に残っています。親元を離れたことで私たちは家族の温かさや地元塩竈のよさを学ぶことができました。たくさんのことを学ぶ機会を下さった奥州市の方々には、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

二学期は、農業体験が終わってすぐに、二中三大行事の一つである二中祭が行われました。何をするのか分から

ず、期待に胸を膨らませてステージを見つめていました。オープニングの太鼓から始まり、学年行事の発表、吹奏学部の演奏、執行部の劇、よっちゃれなど、どれも楽しいものばかりでした。二中祭は生徒みんなで創りあげるものだということを感じました。

昨年私たちは、先輩方の立志式に参加しました。それぞれの夢や希望を発表している姿を見て、「来年自分たちもこんなふうに発表できるか」という不安や 二中の伝統をしっかりと受け継がなければならないという責任感、将来の自分への期待など、様々な思いが浮かんできました。

全てのことが順調に進んでいくかのように感じていましたが…。3月11日、忘れられない大きな出来事を体験することになりました。「東日本大震災」という大きな苦しみ、悲しみを体験しました。

そのとき私たちは「大切なこと」に気づかされました。困っていたお年寄りに毛布をかしてあげたり、食事の配給を手伝ったりと「たかが中学生。だけど、中学生にもできることがある！」その一心で、必死にボランティア活動をしました。「ありがとう」その一言がとてもうれしく感じました。

「困っている人達が少しでも笑顔を取り戻せるように」そう思って小さいことからひとつひとつ始めました。私達は「人に感謝される喜び」を感じました。

働いている家族と連絡が途絶え、何日も家族の心配をして不安に怯えた日々。日頃は喧嘩してばかりですが、あの時ほど家族のことを心配した時はありませんでした。家族と毎日一緒に暮らせるということが実は一番幸せなことだと分かりました。今、私達は強く感じています。当たり前暮らし、今、この瞬間がとても幸せだと。

震災の影響は私達の学校生活にも大きな影響を及ぼしました。今年の合唱コンクールは開催自体が危ぶまれました。しかし、多くの方の温かいご支援とご協力のもと、セヶ浜国際村で開催することができました。私達が心を一つにして、強くたくましく生きていこうという決意を持ち、復興への願いを込めた力強い歌声を届けることができたと思います。

新人戦でも、被災したために会場を変更して開催することになりました。私達もその想いに応えるべく、全力を出し切りました。結果は思い通りのものにはなりませんが、この悔しさをばねに6月の中総体に向け練習に

励んでいます。

職場体験では、震災の影響で1日のみの活動となりました。震災の影響が見られた体験先もありました。そんな中でも私達を受け入れていただいた職場の方々には、感謝の気持ちでいっぱいです。仕事をするの大変さを感じたことはもちろんですが、復興に向けて一生懸命働いている方々の姿に感動しました。この経験を生かし、自分の将来に真剣に向き合っていきたいと思えます。

私達は今、先輩方の立志式以上に素晴らしい立志式をつくりあげようとの舞台に立っています。私達は伝統を引き継ぎながらも、新しいことに挑戦していきたいと思えます。大人になるということは、「中途半端は許されない」ということです。今は家族に支えられながら、一步一步大人へと歩んでいる途中です。大人になることへの不安もありますが、「こういう大人になりたい」という理想もあります。今から自分の夢やなりたい自分像などを、14歳の決意として一人一人発表します。

もうすぐ三年生が卒業し、私達が最高学年となります。先輩方が創り上げた伝統を引き継ぎ、さらによりよい二

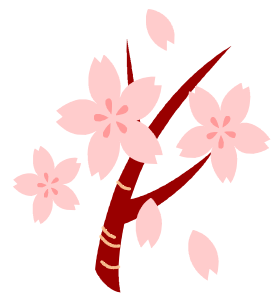
中を創り上げるために、大人への第一歩を踏み出す私達二年生の誓いを発表します。

「誓いの言葉。」

「自分の行動に責任をもち何事にも挑戦していきます。」

「誰にでも優しい心で接し互いの気持ちを分かち合える人になります。」

私達がこの立志発表会の最後に選んだ曲は、カンタータ「土の歌」より、混声四部合唱『大地讃頌』です。今日まで私達を支えてくださった保護者の方々、地域の方々、はるばる奥州市から駆け付けて下さった方々、二中の先生、先輩、後輩、仲間と共にこの日を迎えられることに感謝すると共に、これからもこの大好きな塩竈の地にしっかりと根を広げて、自然豊かな風土と、温かく支えてくださる皆様にアドバイスをいただきながら自分の足で一步一步着実に人生を歩んでいきたいという決意をこめて歌います。



□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

『恐怖』

第三中学校 2年 菊池 妃樹李

3月11日、私はこの日の午後、ストーブに温まりながら寝ていた。

14時46分、ゴゴゴゴゴゴゴ・・・。ん？あれ？？と思った。そしてその時、惨劇は始まった。2日前に起きたマグニチュード5より、もっと長くどんどん強くなって、

「！？うわぁ！！ 何？何？」

私はパニックになっていました。どうしていいものか？ではなく、どうする事も出来ないっ！ 自分では動けない揺れは、どれ位続いたのだろうか・・・。たった数秒なのか。もう何分も続いているのさえ分かりませんでした。

1階にいた叔父が、大声で私に、「お姉ちゃん大丈夫かぁ！？」

私はあまりの恐怖にいつの間にか泣いていました。治まったかと思えば、また揺れが襲ってくる。なかなか思うように体が動けませんでした。揺れが少しだけ治まった間に、物や本がなぎ倒された2階の自分の部屋から1階に降りて

みると、テレビは転げ落ち、食器棚は倒れ何もかもぐちゃぐちゃになっていました。何とか愛犬4匹をつれ家を抜け出しました。

「どうしよう！どうしよう！」こんな時の為に母が言っていた言葉。

「地震が起きたらまず、すぐ近くの小学校に避難しなさい。必ずママが迎えに行くから。」と、分かっているにその事をうまく叔父に伝えることができませんでした。

私たちはとりあえず、妹の小学校へ向かいました。ちょうど、地震で校庭に避難中の妹に会えることが出来ました。私は妹に「必ず戻ってくるから。」と言い残し、叔父の実家の仙台の宮城野区高砂へ向かうことにしました。この時はまだ、母の言いつけをちゃんと守っていたらと、後から気付くことになるとは思いませんでした。まさか、こんな大惨事になるとは思ってもみなかった。

国道45号線を仙台方面に向かってっていると、信号も全て機能を失い、車は渋滞しうまく進まない。みんな考えていることは同じなの

だろうけど、やっぱり、もどかしくなってきました。(早く動いてくれないかな……。) 塩竈から多賀城に入りしばらくすると、『ソレ』は、私たちにも静かに襲いかかってきました。地面をスゥと這うように……。渋滞している車の横を走り行く人達は、ちゃんと声を上げて私たちに警告して言ったのに、目の当たりにするまでは、イマイチ、ピンときませんでした。

「津波がきているぞぉー」「えっ？津波??」建物と建物の間からソレはきた!!「津波だ!!」自分たちの車の所にもあつという間に水が来て、車が浮いてきた。叔父が「お姉ちゃん!危ないから頭低くしている!!」訳も分からず言われたとおりにし、愛犬達を抱き寄せた。他のいっぱい渋滞していた車も私たちと同じに流され、ぶつかったりしている車もあったと思います。私たちの車は横転だけはしませんでした。あつという間でした。

奇跡的に近くのアパートの所に引っかかり2階の住人に助けていただき助かりました。その夜は、

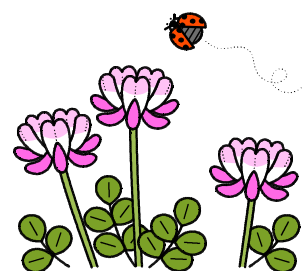
余震が続く中、2DKのアパートに総勢20人程の人達とお互いに声を掛け合いながら一夜を過ごしました。

次の日の朝、私達はお世話になった方々へお礼を言い、母と妹の待つ小学校へ歩いて向かうことにしました。津波はいくらか引いていましたが、11日に雪も降ったためか、大きな水たまりはとても冷たかったのを覚えています。その後無事に大切な人と再会できました。

生まれて初めての自然への恐怖、私だけではない、日本中が思い知らされた出来事……。

【2011年3月11日東日本大震災】

きっと日本の歴史に大きく記され、未来へと語り継がれていくのだと思う。今、現在『恐怖』を乗り越え、ここにいる事を感謝したい。心から、ありがとうございます。



□□□□□□□□□□□□□□□□

思いを伝える言葉

第三中学校 2年 橋浦 ひなの

「何もできない自分が悔しい」それって本当の思いですか。口先だけの言葉ではないだろうか。なぜそう思ったか。

3月11日の大震災以降、毎日のようにテレビやラジオで流れる応援メッセージ。でもどこかで他人事のように、口先だけの言葉のように聞こえる。なぜだかその思いは、なかなか消えようとはしませんでした。あの時までには……。

ある日、震災後からずっと毎日、支援活動をしている父が、津波の被災地で撮った多くの写真を私に見せてくれました。そこには、私たち家族の思い出の場所や、大好きな町が、津波によって見るも無惨に破壊された光景が映っていて、その衝撃的な有様に、胸が締め付けられる思いがしました。

今、自分にできることは何なのか。考えればすぐにわかります。それは、ボランティア活動をすることです。張り切って出かけた初日、家を出発したときは、楽しみでならなかったボランティア活動なのに、いざ始めてみるとへドロを取り除く作業や、冷たい水を

使って掃除をする作業は、想像以上に大変で何度も手が止まりそうになりました。それでも周りには、手を凍らせながら掃除をする人、腰を丸めながらへドロを取り除いている人がいて、みんなが与えられた仕事を懸命にこなしていました。そこには「手伝わせていただく」気持ちが溢れていて、手伝ってあげようと思って参加した自分が恥ずかしくなりました。私には「自分も被害者なんだから」という甘えがあったのかもしれない。

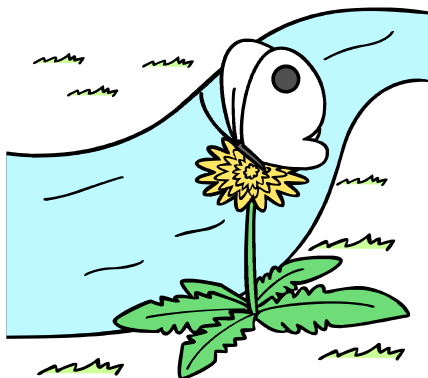
無事、初めてのボランティア活動が終了し、帰ろうとしたその時、「ありがとう」という言葉が聞こえました。一人暮らしのおばあさんが、笑顔で声をかけてくれました。

私のような中学生からすれば、こんな作業はたいしたことではありません。つらいと思っても、かじかんだ手や身体はしばらくすれば元に戻りますし、丸めて少しこった腰だって、次の日には元どおりです。しかし、大人の人にとっては、重労働なのだろうとしみじみ感じました。

次の日も、やはり私はボランティア活動をしていました。昨日は大変だと思った作業も、今日は全く苦ではなく、むしろ楽しいと思ったほどです。似たような作業をしているはずなのに、な

ぜこんなにも感じ方が変わったのでしよう。それは、活動を終えたときの温かい言葉があったからです。どんなに大変な思いをしても、最後には「ありがとう」という言葉が待っている。この言葉に私はどれだけの喜びとやりがいを感じたことでしょうか。

普段の生活で何気なく使っている言葉。その言葉の持つ力をこれほど考えさせられたことはありません。私たちはこれからもこの言葉に支えられ、時に傷つき、時には疑問を持って生きていくでしょう。それでもあなたの中にある、その大切な思いを言葉にして伝えて下さい。その言葉がきっと誰かの支えになるはずです。そして私も人を笑顔にできるような、温かい言葉を伝えられる人になっていきたいです。



□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

当たり前のことに感謝

第三中学校 1年 高橋 翔

平成23年3月11日、その日は、もうすぐ小学校を卒業する僕たちの卒業式の練習をしていました。そしてこの日は、僕のお母さんの誕生日でもあり、おうちに帰った後は、お母さんに「お誕生日おめでとう」と手紙を書く予定でいました。

午後2時46分、突然大きな揺れがやってきました。体育館の窓ガラスがものすごく揺れて今にも割れそうになり、天井のライトも落ちてきそうでした。その揺れは今までに経験したことがない程の長い時間と大きな地震で、僕は怖くて怖くて、心の中で「早く収まってくれ」と願うばかりでした。地震の揺れが収まり、先生の指示で全員外に出て、しばらく校庭に避難していました。外は聞き慣れないサイレンの音が鳴り響いていて「津波が来るので高台に逃げて下さい。」と何度も何度も放送をしていました。津波って何。しかも6メートルの高さの津波って。僕は津波を見たことがないので想像することもできず、ただただ、普段の地震の時とは違う大変なことが起きているんだと不安になりました。校庭で待

ってる間に、僕はおじいさんとおばあさんのことが気になりました。僕のおじいさんとおばあさんは南三陸町でホタテの養殖業を営んでいます。いつもこの時間は二人とも海に行き、仕事をしている時間です。もしかして二人とも海の上において、地震が起きた事、津波が来る事を知らないんじゃないか、もしそうだとしたらもう二人に会えなくなるんじゃないかと、とてもとても不安で涙が出てきそうになりました。なかなか余震が収まらず、雪が吹雪いている中、校庭にお母さんと姉がきていた事にびっくりしました。でも、二人とも無事だったんだと安心しました。そしてその日はそのまま小学校の体育館に家族四人で泊まることになりました。

体育館の中には沢山の人が避難してきていて、いつもは広く感じる場所も狭く暗く寒く、これからどうなるんだろうと不安でした。お腹がすいても食べ物はなく、電気も非常用のライトで、寒くて寒くて、友達とくっついて寝るのが暖かく感じました。よくテレビで、外国の戦争や貧しい国の子供たちを見てかわいそうだなと思っていましたが、もしかして今この状況がそれに似ているのかなと思いました。でも、もっともっとひどい思いをしている人たちが、世界中にはまだまだたくさんいるんじ

ゃないかなと思いました。それでも生きていくために精一杯働いてる人がたくさんいる。僕たちは当たり前のようにご飯を食べて、好き嫌いを言っっては食べ残したり、寒ければがまんすることなく、すぐにヒーターをつけて暖まったり、何不自由のない生活をしていることが、本当は幸せなんだとそのとき思いました。

翌朝になって、母から家に行くと言われました。でも津波のあとを歩いていくのは正直いやだったので「ここで待ってる。」と言いました。でもお母さんに「家族が離れるのは嫌だから、歩いて行けるところまで行こう。」と言われ、家族四人で歩いていくことになりました。僕の自宅は海と川に囲まれたところにあり、お母さんに「多分家はないものと思いなさい。」と言われました。自宅に近づくほど津波の恐ろしさを思い知らされました。

普段はグラウンドになっているところには海水がたまって魚が泳いでいたり、道路にはひざぐらいまで水があり、車は何台も何台も重なり合って、まるでスクラップ屋さんみたいになり、窓ガラスがなくて空っぽになってしまった家、船が道路まで流され横倒しになっていました。言葉が出ませんでした。このとき僕は、またおじいさんとおば

あさんのことを思い出しました。塩竈でこんなにひどい状態だったら間違いなく南三陸町にいる二人はだめだろう。お母さんに聞いても「あきらめた方が
良いね。」と言った。本当は、「大丈夫だ。」という言葉が欲しかったのに。僕は悲しくて悲しくて何も言うことは
できませんでした。このときお母さんは僕たち兄弟にこう言いました。

「私達は生かされたのかも知れない。この震災で亡くなった人、行方不明の人がたくさんいる中、こうやって家族がそろっていられたことは、生きなさいと選ばれたのかも知れない。こんな出来事があると人の良いところや悪いところがたくさん見えてくる。だから絶対にずるいことをしてはだめだよ。自分たちでできることは文句を言わずやろう。食べ物もあるものをありがたくいただく。困ってる人がいたら助けてあげよう。」

僕はこの震災がなかったら気づくことができなかつた事、『**当たり前**の生活、**当たり前**の学校、**当たり前**の友達、**当たり前**の食事、**当たり前**の家族』、この当たり前がどんなに大切にどんなに幸せなことだったか思い知りました。これからはこの思いを忘れずに**当たり前**のことに感謝し生きていきたいと思いま
す。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□

震災から学んだこと

玉川中学校 3年 川瀬 彩音

3月13日、震災から二日が過ぎた日の夜。私は、何とかガソリンを入れることのできた父の車の中で、震災後初めてテレビを見ていました。

南三陸町にある公立志津川病院。ここで、多くの人々が津波によって亡くなりました。そのニュースを伝えるアナウンサーの声が、車の中にはっきりと響いてきました。

窓ガラスが割れ、ボロボロになってしまった病院。それを見た私の目からは、涙があふれてきました。

不思議な気持ちでした。本当ならば、人々の命を救い、新しい命を誕生させるはずの病院、そんな場所で多くの命が失われたという事実を、その時の私はよく理解できずにいました。ただひとつだけ分かっていたのは、自分がその病院で生まれた、ということだけでした。

私が生まれた町には、祖父と祖母がいます。三陸の、澄んだ美しい海で遊んだ記憶が思い出されるとともに、そんな海が人の命を奪ったことに、深い悲しみを感
じました。そして、この震災が他人事ではないのだと強く思いま

した。

どうしたらよいだろう？一瞬のうちに家も家族も生活も津波で流されてしまった多くの人々は、どんな気持ちでいるだろう？今の私には何ができるだろう？私は何をすればよいのだろうか？

答えが見つからないまま、何もせずに毎日が過ぎて行きました。「私という小さな存在が、直接人の命を助けることなどできない。私は、何もできない人間なのだろうか？」

思いながら、私は、自分への弱気な問いかけに対する答えを見つけ出すため、何度も考えました。

そして、出した、自分なりの答え。「できないと置いていけばできないままだけれど、できるまで努力をすればできるようになれるんだ！」

この答えは、今までの学校生活や部活動などで学び取ったことです。そして、このあきらめない姿勢は、今私たちが本気で取り組んでいる受験勉強についてもぴたりとあてはまる姿勢だと思いました。

私は、あの東日本大震災を体験してから、節電に心がけるなど自分にできることを見つけて取り組んできました。また、合唱コンクールの伴奏の練習や高校受験に向けての小論文練習などでも、努力し続けることでその成果を得

ることができました。

これから生きていく中でも、力のない自分について何度も考えさせられることがあるでしょう。その時も、あきらめることなく、自分で考え努力し、強く成長していきたいと思います。

こうして私は、震災をきっかけに、今の自分にできることを考え、努力することの大切さを改めて感じることができました。ほかにも、震災から学び、考えさせられることはたくさんあるのではないのでしょうか。そうした様々なことを生かし、被災された皆さんの役に立つ方法を見つけ出して、安全で明るい未来を作っていくことができれば、この震災にも意味があったのだと私は思います。

そして、これからの未来を作っていく人間の一人として、私は次のように決意しました。

「昨日の自分のできなかったことを、明日の自分はできるようにするため、今日の自分が努力するんだ」

これからの明日が、幸せと笑顔であふれることを願いつつ。



□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

あの日・あの時を忘れない

玉川中学校 2年 田畑 育美

未曾有の大震災から、もうすぐ一年になります。私は、「時間が経つのは早いな。」と思いました。けれど、その時間の中で多くのことを感じ、学んだことはたくさんあります。

あの日、私は友達3人と本塩釜駅行きのバスの中にいました。塩釜ジャスコで遊ぼうとしていて、すごく楽しみにしていました。ですが、その楽しみは一瞬にして恐怖に変わりました。

裏坂の信号で止まっていたら、突然大きな揺れが。私が今まで体験したことのない長く大きな揺れです。頭はパニック状態で、友達も泣いていて……。 「ここからどうしよう。」と不安に思っていたとき、バスの運転手さんが、「バスは横転しない限り死なないから大丈夫だよ。」と。

今思うと、少し怖い言葉ですが、あの時の私にとって、この言葉は何かの希望を感じました。バスの中には、私と友達3人と運転手さんだけで、本当は本塩釜駅で降り

るはずなのですが、運転手さんが気を利かせて下さって、津波警報が鳴る中、安全な場所へ移動してくれました。そうでなかったら、あの恐ろしい津波に……今の私はいなかったことでしょう。私は、あの運転手さんに助けられました。

あなたもあの日、多くの名前も知らない人や名前を知っている人に、助けられたと思います。もしあの日、その人と会わなかったら、あなたの運命は変わっていたことでしょう。そう思うと、人と人が助け合うことの大切さ、忘れてはいけないことを、あの日・あの時に学んだと、今、感じています。

私には、もう一つ、あの日・あの時を忘れてはいけない思い出があります。

家の中が落ち着いてきて、何となく手持ちぶさたとなり暇を感じていたある日、私は友達とボランティアに行きました。

まず、びっくりしたことは、参加者の多さ。私が参加した日は、軽く100人を超していたでしょうか。参加者のグラフ図を見ると、北は北海道から南は沖縄まで、外国から来ている人もいまし

た。みんながひとつになっているのだな、と嬉しかったです。

初めてのボランティア活動は、「成田屋」さんでした。海との距離は数キロメートルで、外にはまだ津波で流れた車や、ヘドロが乾き砂煙が舞い上がっている荒れ果てた状態でした。自分のふるさとが……と「うわー」という声しか出なかったです。成田屋さんでは、一階が津波で浸水。一階は、お店を開いていたので、お皿やテーブル、冷蔵庫など全てが泥だらけでした。私たちは、お皿洗いや、泥がたまっている床などを丁寧に時間をかけてボランティアをしました。お昼ご飯を食べているとき、成田屋さんのご夫婦がお話をしてくれました。

あの日のこと、そしてこれからのお店のこと……。この時、ご夫婦は、「お店を開くかは、まだ分からない。」と、悩んでいました。ただ、私は、「がんばってください。」と、それしか言えなかったです。

その後は、少しでも成田屋さんがお店を開けられるようにと作業に取りかかりました。

あれからしばらくして、たまたま成田屋さんの前の道路を通ったら、窓に「成田屋、営業中！」と張り紙が。見た瞬間、すごうれしかったです。

ただ暇だったので友達と行ってボランティアをした場所が、立ち直って前に進んでいるんだ。「ボランティアっていいな。」と思いましたし、何より、少しでも力になれたことがうれしかったです。

今まで、ボランティアという社会事業に参加したことがなかったので、人と人とが協力していくことのアタタカさ、大切さを、身に染みて感じました。

私が思うに、私たち若者がしなければいけないことは、最低でも二つあると思います。

まず、一つ目は、次の世代に、あの日のことを伝え、その中で必死に人と人とが助け合って協力して生き抜いたことを、伝えて行くことだと思います。50年後、百年後、千年後……次の世代から次の世代へ、再びこの悲惨な被害に出会わないためにも。

そして、二つ目。地震・津波に対応したふるさとの再生も、私た

ち若者のしなければいけないこと
です。今回の震災で、私たちは震
災に対する甘さを痛感しました。
岩手県宮古市の日本一の防波堤、
地元では万里の長城と呼ばれた偉
大な建築物があります。しかし、
津波はその日本一の防波堤を軽々
と乗り越え、家々を飲み込みまし
た。他の場所でも、防波堤が破壊
されたり、防災無線が聞こえなか
ったり……どの地域にも、やはり
防災の甘さがあったことは、残念
ながら否めません。

これからの町づくりは、私たち
若者がやるべきことでしょう。地
震・津波が来ても安全な町である
と同時に、昔の地元の姿を残した
町づくりをしていきたい。津波の
被害にあった建物は取り壊され、
更地になっています。それは、懐
かしさと同時に残念な気持ちを呼
び起こします。昔の面影を残しつ
つ安全な町へと発展させられれば、
と思うのです。

私は、あの日・あの時に感じ学んだこ
とを、忘れないで生きていきます。

3月11日……もう少しで一年です。あ
なたは、何を感じて、生きていきますか？

□□□□□□□□□□□□□□□□□□

震災を経験して学んだこと

浦戸中学校 2年 内海 実夢

「ゴゴゴォーン」あのすべてをなぎた
おしてゆく津波、その勢いは私の住む
島をあとかたもなく粉々にしていった。

津波が過ぎた後の島は想像をはるか
に超えるものであった。木は折れ、道
路はめくれあがり、家は流され形を失
っていた。生まれてから今までずっと
住んでいた思い出のあふれる島を、あ
の一瞬で奪っていった。

震災後、避難所の皆さんの顔を見て
も何をすればよいのか考えることがで
きず、頭の中が真っ白になってしまっ
た。(自分は今、何をすればいいんだ)

一週間がたっても、自分の頭の中
ではいまだに整理がつかなかった。いつ
ものように避難所で手伝いをしてい
ると、先輩がこういった。「たしかに今
の状況はひどいけど、大変だ大変だな
んて騒いだって何も変わらないんだか
ら、これからどうやって新しい浦戸を
作っていくかを考えればいいんだよ」

その言葉を聞いて私ははっとした。
過ぎたことをいつまでも気にしてい
てもしょうがない。前を向いていこうと
気付くことができた。「震災に負けな
い力 新しい私たちの浦戸」を胸に、
皆で力強く前へ進んでいきたいと思う。

